

「凶相」の「好漢」

——《水滸伝》における人物の容貌描写について——

川 浩 二

はじめに

相術について

《水滸伝》の容貌描写

相術における「凶相」

「凶相」の人物たち

結論

補遺

資料編

1 はじめに

白話小説として最も著名な作品の一つである《水滸伝》の本文は、他の白話小説と同様に、「白話」つまり口語を交えた文体による地文や会話文に、詩や詞、また駢語(1)と呼ばれるものなど、文語のテクストが挿入されることによって成り立っている。それら挿入されるテクストの形式に注目し、それが《水滸伝》にいかなる作用をもたらしているかについて分析することは、先行の研究によって行われて

いるが、本論はそれを目的としない。⁽²⁾ 本論で注目するのは、それらさまざまなレヴェルを持ったテクストにまたがって現れる一つの表現内容である登場人物の容貌であり、それらの表現における寓意(3)についてである。《水滸伝》の文中において、登場人物の容貌は、しばしば服装、年齢など、他の外的な要素とともに複合した形で登場し、その頻度も他の長編の白話小説に比して高い。それらの表現は、しばしば以下のように記述される。

武行者看那大漢時、但見：

頂上頭巾魚尾赤、身上戰袍鴨頭綠。脚穿一對踢土靴、腰繫數尺

紅搭膊。面圓耳大、唇闊口方。長七尺以上身材、有二十四五年

紀。相貌堂堂強壯士、未侵女色少年郎。

(第三二回 孔亮)⁽⁴⁾

形式からして、こうした表現の小説全体において果たす役割について考えるためには、一度に登場する表現全てについて分析するべきであろう。⁽⁵⁾ しかし、それらの表現の寓意について考えるためには、容貌に関する表現のみに注目する方法も十分に有効であると考えら

れる。それは、それらの表現が、中国において長く行われてきた、一種の占法である相術を利用することによって成り立っていると考えられるためである。⁽⁶⁾ ある身体的特徴が、その人物の運勢や性格を表しているとする相術は、容易に寓意の表現として利用できよう。

本論においては、《水滸伝》における登場人物の容貌描写が、どのように表れ、またそれがどのような寓意をもっているかについて検討するものとする。

2 相術について

相術に関する独立した書物として、現存する最古のものは、敦煌で発見された抄本《相書》である。残缺を含めれば、数種のテキストが存在することから、敦煌では一般的に行われていたものと考えられる。⁽⁷⁾

この《相書》の中で行われているのは、身体、また顔を構成する部品に分解し、それらの特徴によって、その人物の運勢や性格を判断する、という方法である。以下にこの《相書》による、判断を与えられる部品の分類を記しておく。

面 眉 鼻 耳 人中 唇 口 聲 舌 顎 ……

この方法が、史書において登場する例は、これより以前からしばしば見られる。范蠡が越王勾踐を「長頸鳥喙（長い首に鳥の口）」であり、艱難をとにもすることはできても、楽しみをとにもすること

はできない、と去ったのはもつとも有名な例の一つであろう。

宋代、また元代においても、これら相術の方法が大きく移り変わることは無かったと考えられる。相術の書そのものが、宋代の原本で残されていないが、明代になってからも行われていた《玉管照神局》は、本来南唐の撰であり、原本は失われたが、宋本も存在していた、とされている。⁽⁸⁾ 《夷堅志》には、相術を使う古い師は天庭、つまり眉間をまず観て、そこに黄色が現れれば吉と判断する、という話を載せているし、⁽⁹⁾ また《輟耕録》も、肖像を描くものは相法（相術）に通じていなければならない、とする。⁽¹⁰⁾

元刊の資料としては、類書《事林廣記》巻八に、比較的まとまった相術に関する記述がある。⁽¹¹⁾ ここでは、敦煌《相書》や、後の各種の相術書に見えるような、顔の各部に名称を記した図像が挿入されているのを見ることができるといえる。

明代になってのちも、いわゆる日用類書には、多く「相法門」として一門類が立てられ、これら類書を受容層の生活の中にも、相術が浸透していたことが予想される。⁽¹²⁾ 日用類書の記述については後に詳述するが、また明清代にさかんに行われていたと考えられる相術書である《麻衣相法》や、《神相全編》を見ても、項目やその記述の方法が詳細に成長するものの、分類と判断については大きな変化は見られない。

つまり、相術は白話小説の醸成よりもはるかに先んじて存在し、また各代を通じて、人々が常識としていたと考えられる。その間に、

美的感覺の変化は大いにあつたはずだが、そうした価値観が相術に反映されて、既存の判断が完全に覆る、という例は少ないようである。

《水滸伝》の成立が、複数の人間の手になり、また長い時間を経たものだとしても、また《水滸伝》の受容が、その成立から大きく下つた時代の人間にまで渡るとしても、それらを取り巻く全ての環境の中に、相術による人物の容貌に対する認識があつた、と考へて問題はないと思われる。

3 《水滸伝》の容貌描写

《水滸伝》本文⁽¹³⁾において、容貌に関する形容を与えられている人物は、八十人を上回る。それらの人物の容貌の描写には、さまざまな手法が取られる。以下に形式と内容による分類を挙げておく。また、それが実際に作中でいかなる表現になるかについては、末尾の資料3に実例を挙げた。

1 叙述形式による分類

詩による表現⁽¹⁴⁾ 七言絶句 七言律詩 七言古詩 五言律詩

詞による表現⁽¹⁵⁾ (西江月 臨江仙 沁園春 念奴嬌)

駢語による表現⁽¹⁶⁾

地文による表現

1 叙述内容による分類

顔 頭 顎 髪 ひげ 眉 目 口 齒 耳 鼻 脚 腕 腰 身体 身長

叙述形式による分類に挙げたものについては、地文による表現以外は、基本的に、「但見」、「有詩為証」などという前置きの語が入つた後に、版面上では改行と一字落としが行われる。また、その際には、ある登場人物の目の前に現れたもう一人の人物として、「楊志がそのものを見ると、姿かたちはすさまじいばかりでありました」⁽¹⁷⁾などの言葉が入られることが大半である。

叙述内容による分類にあげたものについては、それぞれに、形状や色などが注目され、さまざまの修飾の語が付されて表現されることになる。例えば目ならば環眼 鳳眼 杏子眼 蜂目 虎眼 三角眼 神眼などである。

これらの表現を文中に登場させる際には、部品に当たる内容を形式に合わせて組み合わせていく作業が必要になると考えられる。その際、もつとも単純なのは、既に史書などに登場している表現の組み合わせを利用することである。林沖の容貌「豹頭環眼、燕頰虎鬚」⁽¹⁸⁾などは代表的な例と言えよう。また逆に、魯智深の容貌である「面圓耳大、鼻直口方」などは、白話小説一般に登場する表現となつて⁽¹⁹⁾いる。しかし、記述の詳細さと、その取る形式の多用さは注目されてよい。また、第十八回の宋江の容貌の描写には、相術の書に登場する顔の部分の分類名称である「地閣」、「天倉」⁽²⁰⁾という語が使われるが、これはむしろ特殊と言え、他に作中に例がない。全体として

は相術と分類を共有しながら、特殊な用語はあまり用いず、具体的なイメージを展開していく例が多い、と言えよう。

4 相術における「凶相」

相術は、占術の一種である。そのため、ある人物に対して、その運命の吉凶を占うこともできる。しかし、ある人物の性格的な特徴、その好悪を診断するという意味も、非常に大きい。例として、明代の日用類書、《五車拔錦》⁽²¹⁾に記載の「相法門」の内容について見てみよう。これらの類書においては、しばしば版面は上下二段に分かれ、それぞれに同じ門類に属する、異なる書物の本文が書かれている。下段には多く画像を載せており、中でも目を惹くのが、ある一つの相について、名称、画像、またその相の特徴を表した歌、詞などを付して載せる、という形式のものである。⁽²²⁾

「歌」はしばしば七言句を列ねる形式で、「詞」は西江月の詞牌を代表とする。相の名称として挙げられるのは、以下のようなものである。

大貴相 大富相 彌壽相 貧窮相 夭逝相 凶悪相 刑傷相 孤
独相 盜賊相 (《五車拔錦》による)

これらは、一見して分かる通り、全ての人間を分類するために作られているものではない。特殊な運勢、もしくは性格的特徴を持つ人間について書いたものである。また、はじめの三つの相がそれぞ

れ福、禄、寿の幸運を受ける相である以外は、いずれも良い運勢や性格のものではない。凶悪相、盜賊相などは、一見ただだけで悪人、と思える手配書のようなものである。つまり、幸運が得られる「吉相」と、不運を得ることになる「凶相」に加えて、良い人、善人の「好相」と、人に危害を加える悪人の「凶相」とが、同様の扱いをされて登場している、ということである。

吉に対する凶、であれば当然、好相に対する悪相、とすべきところを、敢えて二つともに「凶相」としたのは、相術の書の中で、吉運の持ち主の相と、好印象の相、というのがかならずしも一致せず、吉運がしばしば異相、変わった印象の相によって示されるのに対して、凶運の持ち主の相と、悪い印象の相は、一致することが多いためである。⁽²³⁾

これらの相の記述が、類書を読む人々の生活において、どのように機能していたか、その実際のところは分からない。しかし、少なくとも、ある人物の容貌、つまり相を見たとき、相手の持つ運勢を占うことがあったのと同様、例えば相術書の挿画にあるような容貌の人物を見たときには、凶悪相や盜賊相の性格を想起していただろうことは想像に難くない。

白話小説、ことに《水滸伝》との関係で言えば、記述の形式として、「歌」や西江月の詞牌を使う、ということは、一つの類似点として指摘できよう。《水滸伝》本文において、もつとも頻繁に登場する詞牌が西江月であることも注目できる。字句を対照してみると、例

えば他の白話小説、《平妖伝》などにおける表現とのように類似した表現は出てこないものの、相全体を構成する、一つ一つの部品については、共通する部分も指摘できる。

また、特殊な人物のタイプ、ということであれば、《水滸伝》には、「凶悪」と呼ばれるような性格の人物はしばしば登場するし、また「盗賊」を生業とするものも多い。《水滸伝》の物語を知っているものが、逆にそうした登場人物たちの姿を思い浮かべる際に、相術書の挿画を連想する、という例もあることが予測できる。こうした予測のもとに、いったん凶悪相と盗賊相の要素を分析し、それを《水滸伝》の登場人物たちの容貌表現と比較してみよう。

凶悪相の特徴（原文は末尾資料1）

眼が赤く血走る。白目が多く、斜めに見上げる。鼻が剣のように鋭く、頬骨が出ている。肉付きはごつごつとしていて、歯がむきだしになる。

盗賊相の特徴（原文は末尾資料1）

羊眼、鼠眼、狗眼とよばれる眼をしている。目つきが悪い。眉毛が刀のようで目に迫っている。歯がむきだしになる。髪やひげが赤い。

これらに登場する要素が、部分的とはいえ与えられている人物が《水滸伝》の文中にはかなり数多く登場する。部分に分けて指摘しておく。また、《水滸伝》原文については末尾資料3にまとめた。

さらに、以上のように、盗賊相や凶悪相にまとめられたもの以外

にも、明清代に主に行われていたと考えられる種々の相術書には、様々の「凶相」、性格の凶悪を示すものと、運勢の凶運を示すものが現れている。それらとも比較し、共通の部分がある人物を抽出する。相術書の原文は末尾の資料2に、また登場人物の原文は資料3にまとめた。

髪・ひげ 髪や、ひげが赤いもの、ひげの量が少ないもの、など。

《水滸伝》の文中で、これらにあたる形容を与えられているのは、以下の人物である。朱貴 楊志 阮小七 孫二娘 張青 蔣門神 燕順 石勇 李立 張横 費保

髪やひげが赤い、と言えば、紅毛碧眼、蕃人の持つ異相、というのが白話小説を読む限り、真っ先に思いつくが、《水滸伝》の中では登場人物に比較的よくつけられている表現であった。もつとも、《水滸伝》文中にも、蕃人、もしくはそれに似た容姿の人物につけられていることもあり、これは例外とする。

頬骨 頬骨（顴骨）は、《水滸伝》文中では拳骨と書かれる。この通称は相術の書物にもしばしば見られる。頬骨が隆起し、ごつごつとしているもの。三拳（顴）面という表現が相術の書物に見えるが、これと張青の「三拳骨又臉兒」は同じものであろう。これも頬骨の隆起を表すと考えられる。こうしたバリエーションも含めて、同種の表現を持つ人物は以下の通り。朱貴 阮小二 張青 石勇 狄成 肉付き 顔もしくは体について、「横生」という語が付される。ごつごつと張った肉付きを形容する。この表現が付される人物は以下の

通り。崔道成 阮小七 蔣門神

眼 赤い、血走った目をしているもの。(《水滸伝》)文中では食人行爲のためになる、ともされている。この表現が付されるのは以下の人物である。阮小七 鄧飛 李達

頭 頭の形が尖っているもの。蛇形とも。李忠 王定六

鼻 鼻が上向いているもの。宣贊

唇 唇が歯を隠さずめくれているもの。鮑旭

三角眼 張横の眼は「三角眼」とされる。(《太乙照神局》)に、「三角

眼にして、光射せば、狼毒を主とす。(卷一 秘伝口訣)」とあり、

「凶相」の一つとなっている。ちなみに、《明史》にもこの語が見え、「性、必ず殺人を嗜まん」とされている。⁽²⁵⁾

前掲の相は、それが「相」である以上、この中の一つでも満たせばなるものではなく、全体のうち、幾つか以上の要素を持つてはじめてその相、と判断されるものと考えられる。そのため、《水滸伝》の登場人物の容貌表現は、幾人かの人物を除いて、これらによって凶悪相や盜賊相そのものとすぐに決まるものではない。ただし、それらの表現によって、想起されるイメージに方向性がつけられている、と考えるのは足りよう。

以上、全登場人物の中で、多かれ少なかれ、こうした「凶相」に関係する表現を与えられているものは、のべ二三人に及ぶ。本節のまとめとして、再び挙げておく。

崔道成 楊志 朱貴 劉唐 阮小二 阮小七 孫二娘 張青

蔣門神 燕順 石勇 李立 張横 李達 鄧飛 李忠

段景住 宣贊 鮑旭 王定六 費保 狄成 計二二人

5 「凶相」の人物たち

前掲の二三人の登場人物について、いくつかの分析を行ってみよう。まず、彼らはいかなる登場人物であろうか。

梁山泊の好漢に名を列ねるものは、崔道成、蔣門神、費保、狄成を除いた計一八人。また、梁山泊の味方はその一八人に費保、狄成を加え、計二〇人である。ただし、作中で詳細な容貌の表現が与えられている人物は、そのほとんどが梁山泊の人間である。そのため、この結果は数字ほどの説得力は持ち得ない。逆に、こうした表現が、作品内部における主人公の側と敵の側、双方に存在しうるのは確認できよう。

作品のどの時点でそれらの表現が文章に上るか、を確認すると、圧倒的に多いのがその人物の初登場の際である。李達は初登場の際にはその色の黒さ、体の大きさが示されるのみであり、また李忠は初登場の際にはまったくその容姿が説明されないが、他の二〇人は全て初登場の際に容貌に関する記述があり、その中で前掲の「凶相」の要素が登場している。

登場人物の身分や立場を確認すると、正業を持っている人物より

も、それを持たない人物が多く、さらには金品の強奪など、犯罪を主とするような人物が多いことが見て取れる。崔道成や燕順など、むしろ犯罪を生業としているような人物、いわゆる「強人」として存在するような人物はその代表であろう。逆に正業を持つ、まともな暮らしに近い人物といえば、阮小二、阮小七などである。しかし、二人は漁師という正業を持つてはいるが、「智取生辰綱」、つまり宝物の強奪のために呉用がスカウトする人物である。犯罪行為と無縁とは言えない。そうして確認してみると、国の制度の中に身を置いて、正式に職業を持ち、すねに傷持つ身でもない人物というのは、官軍の武将として登場する宣賛しかいない。しかも、彼の綽名は「醜郡馬」、その顔の醜さが強調されている人物であり、この宣賛については、「凶相」の要素が、「凶悪」や「凶運」を示すためにあるのではなく、美醜を示すために存在しているとも考えられる。

正式な職業は持っていないが、その人物が罪を犯してはいない、という人物は、石勇と、また以前に花石綱運搬という任務の失敗を犯して任を解かれている楊志である。その他の人物については、作中で直接強奪などの行為を働くもの、また一山を持って強人を生業とするものなど、さまざまだが、梁山泊への入山以前になんらかの犯罪に関わったことが書かれている。

登場する時点では正式の職業を持っており、その後書かれるよほどころないさまざまの事情をもって梁山泊に加わる人間も、また非常に多いことを考えれば、「凶相」の表現の要素が無作為に登場人物

に付されているのではなく、たとえば凶悪相や、盜賊相を体現していかかしくない人物を選んで用いられていることが確認できよう。以上をまとめてみると、前掲の「凶相」の要素は、作中に何らかの犯罪行為が示される人物の初登場の際に多く上げられ、その人物には梁山泊の「好漢」となるものが多い、ということになる。

こうした傾向は、なぜ起こってくるものであろうか。

《水滸伝》の登場人物の容貌描写は、3節ですでに指摘した通り、一つのエピソードの中でいわば主人公となり、語り手に行動を追われていく人物が、目の前に現れてくるもう一人の人物を見る、という語りの中で行われることが多い。直接語り手が情報を先に与えることももちろんあるが、多くは人が人を「見る」ときに得られる情報が表示されるだけである。初登場の後、二度三度と表現を変えながら登場してくることも多い服装の描写に対して、容貌の描写は一度しか表れないことが多い。これは容貌がそのたびごとに変化するものではないため、でもあろうし、また人が人を「観る」行為である相術の用語が使われ、それによる判断が必要なのが初登場の時以外にありえない、ということでもあろう。

物語の展開という点からすれば、《水滸伝》は、さほど先を予測するのには難しいものではない。例えば、宋江が捕らえられて燕順の前に引き出され、燕順の凶悪な容貌が描かれたとしても、読者は宋江がそこで殺されるとは思わず、自分の名声によつて助かる、という予測は立つと考えられる。しかし、乗り越えられるものとは分かつ

ていても、それを危機として成り立たせるためには、現れた人物、そこでは燕順、は災いとしての外見を持つておかねばならない。「見られる」側として登場する、燕順や張青、張横といった人物たちが凶相を持つことは、むしろ当然とすら言える。

そして、そうした凶悪な見た目と行動、の人物が味方となり、梁山泊を形成する「好漢」と呼ばれるようになるわけであるが、そうした人物が反省したり、変化したりするわけではけしてない。作者にとつても、読者にとつても、梁山泊の好漢の中に、凶悪な人物がいる、むしろそうした人物が多い、という認識は前提として存在していたものであろう。

では、これらの「凶相」を持った人物たちは、凶悪、であるとして、凶運、に見舞われもするのであろうか。例えば、さきに挙げた要素のうち、髪やひげ、眉の赤く縮れたものは火の難に会うことがある、などとされる。そうした運命と、作品内部の登場人物の運命は関係するものであろうか。

結論から先に述べれば、占いとしての相術は、《水滸伝》においてほぼ機能していないと言える。むしろ、梁山泊の好漢たちのうち、物語の終わりまで生き残るものはごく少ないために、前掲の人物たちに ついても、ほとんどが非業の死を遂げてしまう。梁山泊に名を列ねる十八人のうち、天寿を全うしたのは、阮小七しかいない。しかし、戦没する好漢たちにしても、相術による占いと関係しているとは考えにくい。

非常に著名な例だが、《金瓶梅詞話》の文中第三二回では、それだけの人物がその容貌を占われ、運勢が指し示されることにより、展開が暗示されている。⁽²⁶⁾しかし、《水滸伝》では、そのような具体的な結びつきを持つような相術の用いられ方はされていない。未来を占うという機能は使われず、人の性質を判断するという機能のみを使われていると考えられる。これを執筆の時代による技法の発展の問題として捉えるか、また作者、作品の個性の問題として考えるかは現在の状態では決め難い。《水滸伝》の好漢たちが、凶星、凶なる運勢の象徴たる星々の生まれ変わりであることと合わせてさらに検討の必要があろう。

6 結 論

前節までに、《水滸伝》における登場人物の容貌描写において、「凶相」をもった「好漢」という存在があることが確認された。そこでの「凶相」とは凶悪な容貌のことであり、また「好漢」とは、いわゆる正義によって立つ人物のことではなく、主人公の側に立つか、そうでないかによる呼称に過ぎない。「凶相」の「凶漢」も、また「好相」の「好漢」もまた、《水滸伝》には存在しうるのである。

《水滸伝》は、第七一回に好漢たちの勢ぞろいを見るまで、ある一人の人物の行動を主に追いながら、次々と仲間を増やしていくことにより展開していく、という構造になっている。それが、第七二回

以降になると梁山泊の軍対遼軍、また方臘軍という集団の戦いを追う形に変わる。

《水滸伝》が成立して以来、第七二回以降の文章が生彩を缺くようになることはしばしば指摘されてきた。金聖嘆が自らの評を加える際に、その部分を除去された状態にしてそれを「古本」と呼んだことも、その一環であろう。それは、梁山泊が官軍に加わるという変質を経ることに原因を帰すこともできようし、展開に個々の人物が活躍するエピソードほどの工夫がないためだ、などということもできよう。

しかし、《水滸伝》が、長編の白話小説としてまとめられていく過程で得た語りそのものが、基本的に「新たな登場人物」を必要としている、と考えられることは、ぜひ指摘しておかなければならない。未知の人物が既知の人物の前に現れる、という場面の連続によって、物語全体が進行していくためである。最終的には百八人も的人物を集めなくてはならないため、しばしば新たに登場する人物は梁山泊に加わってくる好漢である。その未知の人物が、特に危機として登場する際には、容貌も危機を体现して、凶悪なものに描かれる。そのため、《水滸伝》における容貌描写の寓意が、もつとも際立った特徴を持つのが「凶相」、凶悪な容貌をもつた「好漢」、梁山泊に加わる人物、の登場を描くときとなるのである。

《水滸伝》における人物の容貌描写とは、ある容貌から喚起される共通のイメージの源泉として、それまでに長く、また広く行われて

いた相術を利用したものである。そして、主要な人物、「好漢」として現れる多くの凶悪な人物を描出するため、そのイメージの源泉から取り出されたふさわしい「凶相」の表現を、修辭としてさまざまの表現形式の中に取り込んでいる。それらは、新たな人物が登場することによって進行する物語の中で有効に機能し、《水滸伝》という作品を支える一つの要素となっている。

7 補 遺

今回は「凶相」の「好漢」に絞って論を進めたが、先に挙げたような凶悪な容貌の人物ばかりが《水滸伝》の登場人物ではない。その容姿を大丈夫の、あるいは美丈夫の姿をもって形容される人物も数多い。また、女性の容姿に関しても、比較的詳しく形容される部分がある。それらの中には、他のテクスト、《平妖伝》や、いわゆる「話本小説」に表れる、登場人物の容貌の表現を引き写した、もしくはそれらと来源を共有した、と考えられる表現もまま存在する。これらについては別に検討が行われるべきであろう。

本論では、《水滸伝》が成立する際の状況について、地理的な条件や、作者が情報源として手に入れたであろう書物などの物質的な条件を検討の対象から外している。今回相術の書について考える際に主に利用した日用類書の類についても、これらそのものが白話小説の執筆に利用されることがあったかどうか検討を行っていない。

作者と読者が相術に関する情報を手に入れられる素地があり、その素地が基本的に共有されていることを確認したのみである。

また、今回問題にしなかったことの一つに、小説における挿画と本文との関係がある。登場人物の容貌に関しては、《水滸伝》においても、少なくとも今回のテキストである容與堂本においては、ある程度以上意識されて描かれていると考えられる。その具体的な関係については、さらなる検討を要するものであろう。今後の課題としたい。

8 資料編

資料1 日用類書に見る凶悪相と盜賊相

凶悪相《五車拔錦》載《相法紀要》

歌曰：頭痕般剥眼紅紗、黑少白多視太斜。鼻如劍峯顴骨露、面肉橫生鼠齒牙。神氣青藍多烟塵、額上印章亂紋明。鬚濁連鬚唇又黑、不遭十惡定重刑。

西江月：取人利己面黑、残害性令睛紅、見人歡喜太陽空。斜窺眼仰轉動、唇泊好生言語、青藍滯氣重朦。面肉橫網性強。凶九厄喪身无哄。

盜賊相《五車拔錦》載《相法紀要》

歌曰：欲知世間賊相形、額塌頭偏面帶青、眉如尖刀壓雙眼、鼠目昂視覷眉稜。露齒結喉食呑响、口角紋多更流塵。此相不作凶賊輩、定

是鼠竊狗偷人。

西江月：賊與人皆相像、只因損害心田。羊睛狗眼又駝肩。眉毛交雜神昏。鬚鬚赤濁亦甚、天庭兩顴塵烟、目多斜視惡心、堅害人利己無厭。

資料2 種々の相術書に見られる「凶相」

三角眼、光射、主狠毒。

髮赤、鬚黃、主不孝。

髭黃、短少、爲人勞力。朋友無情。

（以上《太乙照神局》）

鼻部 孔仰而露出者、夭死。

三拳面 孤尪。

殺婿三顴面。

髮部 大毛髮黃者 多妨尪。

髮黃而焦 不貧則夭。

肉部 夫肉不欲橫。橫則性剛而兇惡。

（以上《五車拔錦》載《人相神機》）

資料3 「凶相」と考えられる表現

一個胖和尚。生的眉如漆刷、眼似黑墨、慘搭的一身橫肉、胸脯下露出黑肚皮來。

身材長大、貌相魁宏。雙拳骨臉、三Y黃髯、只把頭來摸着看雪。

（第六回 崔道成）

生得七尺五六身材、面皮上老大一搭青記、腮邊微露些少赤鬚。

（第十一回 朱貴）

(第十二回 楊志)

匾兜臉兩眉堅起、略綽口四面連拳。胸前一帶蓋膾黃毛、背上兩枝橫生板肋。

(第十五回 阮小二)

疙疸臉橫生怪肉、玲瓏眼突出雙睛。腮邊長短淡黃鬚、身上交加烏黑點。

(第十五回 阮小七)

眉橫殺氣、眼露兇光。轆軸般蠢空腰肢、棒槌似桑皮手脚。厚鋪着一層膩粉、遮掩頑皮、濃搽就兩盞胭脂、直侵亂髮。紅裙內斑斕裹肚、黃髮邊皎潔金釵。

(第二七回 孫二娘)

生得三拳骨叉臉兒、微有幾根鬚髯、年近三十五六。(第二七回 張青) 形容醜惡、相貌粗疏。一身紫肉橫生、幾道青筋暴起。黃髯斜起、唇邊撲地蟬蛾、怪眼圓睜、眉目對懸星象。

(第二九回 蔣門神)

赤髮黃鬚雙眼圓、臂長腰闊氣冲天。那人生得八尺來長、淡黃骨查臉、一雙鮮眼、沒根鬚髯。

(第三二回 燕順)

赤色虬鬚亂撒、紅絲虎眼睜圓。 (第三五回 石勇)

(第三六回 李立)

七尺身軀三角眼、黃髯赤髮紅睛、潯陽江上有聲名。(第三七回 張橫) 黑熊般一身粗肉、鐵牛似偏體頑皮。交加一字赤黃眉、雙眼赤絲亂繫。

(第三八回 李逵)

頭尖骨臉似蛇形。 (第五七回 李忠)

(第五七回 李忠)

焦黃頭髮鬚鬚捲。 (第六十回 段景住)

(第六一回 李逵)

此人生的面如鍋底、鼻孔朝天、捲髮赤鬚、彪形八尺。

(第六一回 李逵)

(第六四回 宣贊)

捲縮短黃鬚髮、凹兜黑墨容顏。爭開怪眼似雙環、鼻孔朝天仰見。

(第六四回 宣贊)

猙獰醜臉如鍋底、雙睛疊暴露狼唇。

(第六七回 鮑旭)

炸蝻頭尖光眼目、鸞鷲瘦腿全無肉。

(第六九回 王定六)

為頭那個、赤鬚黃髮、穿著領青袖衲襖。

(第九三回 費保)

第四個骨臉闊腮、扇圈鬚鬚。

(第九三回 狄成)

例外 蕃人の容貌

面闊眉濃鬚髮赤、雙睛碧綠似番人。沂水縣中青眼虎、豪傑都頭是李雲。

(第四三回 李雲)

那番官面白唇紅、鬚黃眼碧、身長九尺、力敵萬人。

(第八三回 阿里奇)

注

- (1) 基本的に偶数句で成り立つ、一定のリズムを持つ一段。
- (2) 丸山浩明「水滸伝」中の詩・詞について——百回本から百二十回本への過程——二松学舎大学文学部紀要一九八六・豊後宏記「水滸伝」中の詞「学林一九八八・北村真由美「水滸伝」の入回詩について」中国文学研究一九八八 など。
- (3) アレゴリー。本来の言葉の意味以上の、比喩的な意味によって表す表現形態。「最新文学批評用語辞典」一九九八研究社
- (4) 武行者がその大漢に目をやるや、そこに見ゆるは、
頂上の頭巾は魚尾赤く、身上の戦袍は鴨頭緑の色。脚には一對の踢土の靴

を履き、腰に繫ぐは数尺の紅搭膊。面は聞く耳は大きく、唇は聞く口は方のかたち。七尺以上の身材にして、二十四五の年ならん。相貌堂堂たる強壯の士、未だ女色を侵さざる少年郎。

- (5) わが「平家物語」における武者の鎧かぶとをはじめとする装具に関する表現に見る通り、服装もむろん寓意を持ちうるものである。しかし例えば「平家物語」の武装表現が、制度によって定められた服飾を基礎としていると考えられているのに対して、「水滸伝」における服飾表現は、登場人物が武将から民間人に至るまで、渡っている社会層も広いこともあり、いまま少し慎重な取り扱いを必要とすると考えられる。そのため、服飾表現については、別稿にゆずることとする。

- (6) 白話小説における登場人物の容貌に関する表現が、相術の表現を借りていることに関しては、小川陽一氏の、おもに「三国志演義」と「金瓶梅」に関する先行の研究がある。その中には「水滸伝」の重要な登場人物である、宋江の容貌の記述に対する分析が行われている部分がある。「日用類書による明清小説研究」汲古書院 所収の「明代小説における相法」。

- (7) ベリオ文書二五七二、三四九二に見える二種は比較的整った形で残っている。本稿もそれによった。この「相書」は、書題に「漢朝許負等十二人集」とあり、当時はじめて書かれたものではなく、漢代に書かれてのち伝来したもの、と認識されていたようである。敦煌變文(前漢劉家太子伝)にも、この書物が登場する武帝と東方朔のエピソードが登場する。

- (8) 「玉管照神局」叢書集成初編所収本末尾解題による。

- (9) 「癸巳存稿」巻四、「額黃眉間黃」に引かれる。

- (10) 「輟耕録」巻十一、「写像訣」、「凡写像、須通曉相法」。

- (11) 「和刻本類書集成」汲古書院 所収本巻八。

- (12) 「中国日用類書集成」汲古書院第一巻 所収の坂出祥伸氏による解説を参照。

- (13) 本論において「水滸伝」本文について言及する際には、全百回の形式を持ついわゆる容與堂本をテキストに使用している。排印本「容與堂本水滸

伝」上海古籍出版社を主に利用した。

- (14) 多くの場合、「詩曰」などの言葉が前に置かれるが、「但見」など形式が示されない言葉が前置されるだけの場合もある。

- (15) 「水滸伝」本文中に現れる詞には、書かれる詞牌と中味がずれている場合が存在する。豊後宏記「水滸伝」中の詞「学林一九九八に詳しい。

- (16) 本文に現れる、登場人物の属性表現を含んだ駢語は、さまざまの句型をもって登場する。また、駢語に類似する表現が地文の中にあることを含めて考えると、その正確な分類は難しい。本論では、版本の表面上の特徴、すなわち詩詞と同じく改行のあと一字落としが行われているものについて、駢語として扱う。

- (17) 楊志看那人時、形貌生得粗醜。(第十二回)

- (18) 「三国志」における張飛の容貌。作中でも林冲は「小張飛」と書かれている。(第四八回)

- (19) 「飛龍全伝」、「説呼全伝」などの講史小説に特に例が多い。

- (20) それぞれあごの先、兩眉の端こめかみあたり、を指す用語。

- (21) 前掲の「中国日用類書集成」第一巻所収本によった。

- (22) この形式が日用類書に現れることはめずらしくない。「三百萬用正宗」、「五車萬寶」(いずれも「中国日用類書集成」所収本)にも同様の体裁の相術書が収められる。

- (23) 体質、性格、運命が人の「性」として相互に干渉すること、また強い吉相と凶相は異常であることで等価であるが、好相と悪相は正常と異常であり、等価でないことなど、相術の基本的な価値観については張榮明「方術與中国伝統文化」二〇〇〇学林出版社 所載の「相術篇」にまとめられている。

- (24) これは現在の語り物芸能である評話においても使われる表現であり、京劇における悪役の目の化粧も三角眼、という。

- (25) 明初の怪僧、道衍こと姚廣孝の伝、「明史」巻一四五。たまさか相術を専らとするものに出会った道衍は、その「三角眼」を見て取られ、必ず殺人

を暗むものと言われて、大いに喜んだ、と書かれている。このような悪相、凶相が正史に取られるのは、割合に珍しい。

(26) 前掲小川氏論文をはじめ、論文に取り上げられることは数多い。